

夏休みも残すところあとわずか。2024年の『処暑』は8月22日です。

「処」は落ち着くという意味で、厳しい残暑もいよいよ和らぎ、朝夕は涼しさも感じられる頃。心地よい虫の声にも秋の気配が漂います。

<処暑の時期を示した有名な一句>

あかあかと日は難面（つれなく）も秋の風 松尾芭蕉

<句意>

（もう季節は秋になったというのに残暑は厳しく）太陽は明るく容赦なく照りつけているが、（さすがに吹いてくる風には秋らしい気配が感じられる）秋の風である。

『おくのほそ道』の旅の途中の7月17日（太陽暦8月31日）に、金沢での句会で披露された句です。芭蕉が名残惜しまれながらも、旅の出発をする時に読んだ句です。

お世話になった人への一句！



兼六園内にある句碑



成学寺境内にある句碑。



まだまだ日中は暑い日も多いですが、朝夕には、時折、夏の終わりを感じさせる涼しい風が吹きはじめ、ある日ふと、夜風に、コオロギや鈴虫の声が混じっているのに気がつきます。行楽に出かければ、野山にススキや桔梗などの「秋の七草」を目にし、景色も少しずつ、秋に向かっていくことを感じるでしょう。

秋といえば紅葉のイメージですが、開花する花も多く、たくさんの美しい植物が見ごろを迎えます。「春の七草」に対して、秋にも七草があります。

秋は、萩、薄（すすき）、女郎花（おみなえし）、桔梗、藤袴（ふじばかま）、撫子、葛です。和歌や日本の美術品などにもよく登場します。

秋の七草は、歌人・山上憶良が『万葉集』（巻八）で詠んだ7種の草花にちなんでいます。

『秋の野に 咲きたる花を指折り（およびおり）かき数ふれば 七種（ななくさ）の花』

『萩の花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴 朝顔（あさがお）の花』



萩（はぎ）：秋を代表する花。「おはぎ」の由来にも。

すすき：お月見には欠かせない植物。茅（かや）ともいう。

葛（くず）：古くから食用・薬用として親しまれている植物。

撫子（なでしこ）：可憐なピンクの花。「大和撫子」。

女郎花（おみなえし）：女性らしく美しく華やかな黄色い花。

藤袴（ふじばかま）：絶滅の恐れがある植物。藤色の花。

桔梗（ききょう）：絶滅の恐れがあると危ぶまれる植物。

## 「二百十日(にひゃくとおか)」に警戒すべし、

立春から数えて二百十日は例年、9月1日前後になります。

台風が襲来する日と、丁度、稲が開花する時期とが重なるため、昔から農家の厄日とされ、二百十日や二百二十日の頃には、風の神を鎮めるために「風祭(かざまつり)」という行事が行われてきました。地方によっては、風祭を「風鎮祭(ふうちんさい)」や「とうせんぼう」などと呼ぶこともあります。

1. 富山で催される「おわら風の盆」は毎年多くの観光客も訪れる人気の祭りです。

9月1日から3日まで、三味線、太鼓、胡弓の独特な調べにのって、編みがさを目深にかぶった男女の踊り手が「越中おわら節」を舞います。北陸に秋の訪れを告げるものです。



おわら風の盆



大曲の花火



吉田の火祭り

2. 「大曲の花火」は、例年8月最終土曜日に秋田県大仙市で行われる花火大会で、60万人以上が集まる「日本三大花火大会」の一つとしても知られています。

多くの花火大会と異なり、大曲の花火は競技大会の要素がある点が魅力です。数々の匠の技や練り上げられた最新の技術をお披露目する大会なので、毎年目新しい花火に遭遇することができます。大会のラストを締めくくる「大会提供花火」は総数約2,400発が音楽とともに打ち上がり、壮大な夜空の芸術を創り上げます。

3. 富士山を背景に赤く燃える大松明

毎年8月26日、27日に行われる「鎮火大祭」は、「吉田の火祭り」と呼ばれ、北口本宮富士浅間神社と諏訪神社のお祭りで、富士登山の山じまいの祭りとして知られています。

初日の夕方には御旅所と呼ばれる場所に神輿が到着すると同時に、金鳥居から浅間神社までの沿道に設置された大松明が点火され、富士山を背景に赤く燃え上がる大松明の光景が広がります。高さ3メートル、直径90センチの大松明が100本以上も並ぶ光景は圧巻。約2キロにもわたる上吉田の表通りに1本の火の帯が現れたかのような、美しい景色を楽しめます。

野外で開催されるイベントですが、神事のため雨などの悪天候でも基本は中止になりません。